

メッセージアウトライン マタイの福音書6：11～15 「主の祈りⅡ」

「主の祈り」の前半6：9～10節では私たちがまず何よりも、神の御名が聖なるものとされ、御国が来ますように、みこころが天で行われるように、地でも行われますように祈らなければならないことを教えられた。そして、この主の祈りの後半では私たち人間の日々の生き方に関わる事柄が祈りとなっている。

[11]「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」

ここに前半とは打って変わった単刀直入の願いがなされている。クリスチャンといえども人の子であり、この世で生きていくためには食物が必要である。この世において神のみこころを行っていくためには私たちがまず生存できるだけの食物を祈り求める。そのことの正当性、必要性をこの箇所は示している。しかし、ここで祈られているのは食物のことだけではないことに私たちは気がつかなければならない。「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」とは言い換えると「私たちにその日その日に必要で十分なものだけをお与えください」ということになる。

つまりそれは私たちの物質的な必要の全部、この世における人間生活に必要なすべてのものを含んでいるのである。しかし、ここには私たちにとって過分なものの要求は含まれていない。金持にしてほしい、宝くじを当ててほしい等という願いは含まれていない。昔、旧約時代のアグルという人が祈った祈りがある。→箴言30：7～9

「二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。むなしいことと偽りのことばを、私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で、私を養ってください。私が満腹してあなたを否み、『主とはだれだ』と言わないように。また、私が貧しくなって盗みをし、私の神の御名を汚すことのないように」

「主の祈り」の11節にもこのような願いが含まれているのである。

またこの祈りは自分だけ何とかなればそれでよいというような祈りではない。11節の最初の部分に「私たちの日ごとの糧」とある。「私だけ」ではなく「私たちの」であり。神の子である教会の全員にとってなくてはならぬもの、兄弟姉妹みんなに与えられなければならないもの、それが「私たちの日ごとの糧」となる。教会における献金の一つの意味も実はここにある。

聖書は献金のことについて次のように書かれている。→Ⅱコリント8：13～15

「私は、他の人々には樂をさせ、あなたがたには苦勞をさせようとしているのではなく、むしろ平等になるように図っています。今あなたがたのゆとりが彼らの不足を補

うことは、いずれ彼らのゆとりがあなたがたの不足を補うことになり、そのようにして平等になるのです。『たくさん集めた人にも余ることはなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった』と書いてあるとおりです」

これはイエス・キリストの使徒パウロがコリント教会の人々に送った手紙の中に書かれていることであり、エルサレム教会の貧しい兄弟姉妹たちの生活をコリント教会の人々が献金をもって支えるならば、やがて逆の立場になった時には彼らのゆとりがあなたがたの不足を補うことになり、そのようにしてお互いが平等になると旧約の出エジプト記16:18節を引用して教えている。

それゆえ私たちは海外で労苦しつつ福音を宣べ伝えている日本人宣教師たちの必要のために献げ、又キリストの福音を宣べ伝えるために苦学困窮しながらも学び続けている神学生たちのために、さらに現役の働き人たち、引退や入院して経済的困難の中にある老聖徒たちのために支えていくということは教会の大切な働きの一つなのである。

私たちが主にある兄弟姉妹として共に支え合いながら歩いていくところに霊的な成長がある。

[12]「私たちの負い目をお赦し下さい。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」

ここを読むと、私たちが負い目のある人たちを赦すことによって、私たちも負い目を神に赦されると考えがちであるが、事實はそうではない。私たちはすでにイエス・キリストによって罪を赦された者となっているので他の人を赦することができるのである。これに関してはマタイ18:23~35を参照したい。

ここで言われていることは、私たちが神に赦されていることの証拠は私たちが他人を赦することができるということだというのである。自分は神に罪を赦していただいているが、他人は赦したくないと考えているならば、私たちは間違っている。それはこの12節によれば、神の赦しをいただいていないから他人が赦せないのだということになる。あるいは本当に神に罪を赦していただいた自覚がないのかもしれない。また単なる聖書的知識だけで、実際はイエス・キリストを自分の救い主として信じていないのかもしれない。

私たちは礼拝において、また祈祷会において、また日常の個人的礼拝や祈祷の時にこの主の祈りを祈る者であるが、ここから教えられることはこの主の祈りは私たち信仰者の日々の歩み、人間関係を厳しく量る量りのような恐るべき働きをするということである。

私たちは神の御子イエス・キリストが私たちになしてくださったことを十分知るならば、他の人を赦することができるようになるのではないか。しかし、それは甘い考えだという人が出てくるであろう。自分の家族が殺された。ひどい目にあわされた。一生癒されることのない傷を負わされた。心身ともに深く傷つけられた。どうしてそのよう

の人々を赦さなければならないのか。もっともであろう。

たしかに人は自分の犯した罪の罰を受けなければならない。そのために法律があり裁判所があり、刑罰があり、刑務所があり、死刑もある。しかし、それは最初に創造された人間アダムとエバの犯した罪の結果であり、彼らの子どもであるカインは弟アベルを嫉みと怒りによって殺している。その子孫である私たちすべての人間は皆この罪を持っている。一つ間違えば自分が加害者になる可能性はだれにでもある。憎んでも憎み切れない、恨んでも恨み切れない。そのような思いを抱きながら一生を終わることはあまりにも残念である。復讐は復讐を呼ぶ。そしてそれはいつまで繰り返される。そのことは長い人間の歴史が証明していることである。では泣き寝入りをしろというのか。そうではない。すべてを正しく見ておられ、正しくさばかれる神のみ前にすべての人間が立つべき時が来る。たとえこの地上での法によるさばきが十分ではなかったとしても神は人間それぞれの行いに応じて正しくさばかれるのである。→マタイ16:27、ローマ2:6、黙示録20:11~12

ではどうすればよいのか。

[13]「私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください」

この祈りの言葉を私たちはしっかり覚えておく必要がある。私たち自身のことを考えてみるときに、残念ながら私たちは強くない。むしろ弱いというのが現実であろう。それゆえ、私たちはすべての試みを父なる神からの訓練として耐えることは到底できない。

「天よ。我に七難八苦を与えたまえ」というような祈りは立派に聞こえるが、それは自分の弱さを忘れた祈りと言わなければならない。「試み」とは良い意味では、訓練となり、悪い意味では誘惑や悪との遭遇となる。私たちがいろいろなことで試みられたことで強くなり、前より高い水準に向上できるならばそれは訓練となるだろう。しかし、それに負ける、あるいは害を受けることになるならばそれは悪となる。それゆえこの13節の祈りは、訓練として来るものには信仰をもって忍耐しますが、悪に陥ることになるような試みには遭わせないで、そのような悪からお救いくださいという内容の祈りとなる。

しばしば私たちは人生の試みに出会っていると、いつそのことこの世に生まれて来なければよかったのにと、早くこの世から取り去って天の御国へ入れてほしいなどと性急に考えることがあるかもしれない。しかし、この主の祈りは私たちが地上から逃避するのではなく、自分にとって危険な誘惑や悪は避け、自分の信仰者としての訓練となるような試みは信仰をもって耐え忍ぶことができるようにしてくださいと願い祈ることなのである。私たちは神から与えられるあらゆる試練をいやがるわがままで自己中心な者であってはならない。→ローマ5:3~4

後代の聖書写本にはこの13節に加えて、「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです」が加えられているものがある。

「主の祈り」はここまでであるが、ここでもう一度、赦しのことが取り上げられている。
[14-15]「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しになりません」

これは主の祈りの中で、互いに赦しあうことの必要が特に強調されていることを示すものである。

イエス・キリストが私たちの罪の結果受ける神のさばきの身代わりとなって十字架にかかれ、罪を贖ってくださった。このことを信じ、神の赦しにあずかった者は特に教会の兄弟姉妹の交わりにおいて、お互いに赦しあうことを実践するべきことが強調されているのである。ただし、お互いに赦しあうことが神の赦しにあずかることの根拠ではないということも十分理解しておかなければならない。

ローマ3:23-24「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです」

私たちが救われたのは全くの神の恵みによることであり、これは驚くべき恵みである。

私たちはこの世において神のみこころを行っていくために日ごとの糧が与えられることを願い、またイエス・キリストにあって自分の罪が赦されていることを深く自覚し、同様に人が自分に対して犯した罪の赦しを実践する者となれるように、この主の祈りに励む者とならなければならない。